



## NEWS

- イラク戦争開戦 3.20 を忘れない ..... P.1~2  
生まれてくる命を守りたい ..... P.3  
ナナカリ病院スタッフ感染症対策研修 (1) ..... P.4  
ナナカリ病院スタッフ感染症対策研修 (2) ..... P.5  
福島プロジェクト報告 ..... P.6  
2013チョコ募金へのご協力  
どうもありがとうございました! ..... P.7  
チョコ募金の強力な助っ人の紹介 ..... P.7  
鎌田代表のつぶやき ..... P.8  
JIM-NET 新スタッフよりご挨拶 ..... P.8  
新刊のご案内  
『イラクから日本のおともだちへ』 ..... P.8

## \*\*\*お知らせ\*\*\*

クレジットカードでのご寄付も受け付けております。  
インターネットをお使いの方はぜひお試しください!  
<http://jim-net.net/supporters/#donation>

写真：2003年、米軍の占領が始まり、おびえるムハンマド君(左)とアブディ君(右)。

現在、ムハンマド君はホルン、アブディ君はバイオリンを演奏し、オーケストラのメンバーでもある。

## イラク戦争開戦

## 3. 20を忘れない

10年前、イラクのために多くの人たちが必死で声を上げました。非戦・反戦。それでも、米英のイラク攻撃に日本が強く賛成し、戦争は止められませんでした。

イラクを攻撃する理由は、

- 1) イラクは大量破壊兵器と、弾道ミサイルを開発・保有している強い疑いがあり、他国を攻撃するためであり、それが使用される前に破壊しなくてはならない
- 2) イラクはアルカイーダと協力関係にあるということでした。

しかし、実際攻撃してみると1)も2)もイラクは関係なかったというお粗末な結果になり、アメリカもイギリスも、猛反省しなければなりません。二度とこのような戦争を繰り返してはいけないという教訓です。しかし、「日本がイラクへの武力行使を支持したのは正しい決定であったと現在でも考えている」と、安倍総理(当時)が2006年10月、NHKのインタビューに答えるなど、正しいの一点張りです。

外務省が作った「イラク復興支援」というパンフレットには、以下のQ & Aがあります。

- Q.イラクに大量破壊兵器がなかったといわれています。武力行使を支持したことは正しかったのでしょうか?
- A.2004年10月、イラクにおいて大量破壊兵器は発見されなかったとの報告がイラク監視グループによって行われました。この調査は、対イラク武力行使後に行われたものですが、武力行使以前には国連の査察委員会はイラクによる大量破壊兵器の保有に関する疑惑を具体的に指摘していました。また国連安全保障理事会(安保理)は、何度もイラクに対して国連の調査への協力を求める決議を出しましたが、イラク政府より十分な協力は得られていませんでした。このような状況の中で、最後の手段として、安保理決議に基づいて武力行使が行われました。このような経緯から、たとえ事後的に大量破壊兵器が見つかなかったといっても、対イラク武力行使は国連憲章に合致し、正当なものであったと考えられます。

しかし、このA、明らかに間違っている点が、2か所あります。

① 2002年11月13日にはイラクは「強制査察」を要求する国連決議1441を受け入れ、大統領宮殿を含むすべての査察を受け入れ、12月末には、期限内に12,000ページに及ぶ申告書を提出。UNOVICのブリックス事務局長やIAEAエルバラタイ事務局長は一貫してイラクの査察協力姿勢を評価し、武力攻撃を回避し査察を継続するよう主張していたのです。

② 安保理では、2003年2月24日、米英西がいわゆる第2決議案を提案しましたが、安保理における意見対立が明らかとなり、3月17日（日本時間18日）、米英西は同案を取り下げ、同日、ブッシュ米大統領はイラクに対して最後通告を行ない、開戦にいたりました。安保理の決議を得ていないので、当然国連憲章に合致しているとは言えないでしょう。こういうパンフレット



2003年4月  
戦争当時のイラク

なぜこんなに、もやもやと煮え切らないのかというと、イラク戦争開始時、自民党政調会長だった麻生太郎氏が、「国連と米国が分裂した。とるべきは米国だ」と小泉首相（当時）に進言したと自らの著書（『自由と繁栄の弧』）で述べているように、政府は、日米同盟をどう深化させるかしか考えていないのです。そういった意味でのイラク戦争の支持、自衛隊派遣は大成功という結論なのでしょう。

JIM-NETの「あしたのチョコ」でもそのことを強調しています。日本がほしいもの、日米同盟の深化によって得られる利益、イラクを安定化し、石油の利権を獲得すること。そのためのイラク戦争でした。最近になって、イラクの石油は輸出も伸びました。日本の輸入している石油も5%はイラクから来るようになったのです。石油で儲かると、ドバイやクウェートのように国全体が豊かになりそうですが、イラクはそうではありません。治安は安定せず、街中は、がれきが崩れ、テロが頻繁に起こっています。人々は未だに停電に苦しんでいます。貧富の差は広がるばかり。

ットを一般に配ることに関して、強い憤りを覚えました。検証どころか事実認定ですらが、ごまかされていました。

そういう流れの中で、「イラク戦争の検証を求める市民のネットワーク」が立ち上りましたが、民主党政権でもこれといった成果はありませんでした。

ところが昨年の12月21日、選挙結果で民主党の大敗が決まってから、外務省は、「対イラク武力行使に関する我が国の対応（検証結果）」をHPにて公表したのです。

しかし、イラク戦争を支持したこと自体の是非は検証しない。報告の中には、関係国政府とのやり取り等、そのまま公開した場合には各国との信頼関係を損なうおそれの高い情報等が多く含まれていることから、報告そのものの公表は行わないというお粗末なものでした。

2003年3月8日、  
日比谷公園には4万人が集まり、イラク戦争に反対した



もしあなたが、バグダッドに行けば、「イラクのあした」のことを考えざるを得ないでしょう。私たちは、決して戦争の利益をこうむることもない弱い人たちの立場にたって、戦争反対を訴える必要があります。

3月20日は、イラク攻撃の始まった日です。

10年間イラクの子どもたちと歩み続けた私たちも、早稲田大学のシンポジュームに参加します。ゲストは、ファルージャの虐殺を取材し続けたアリ・マシュハダーニさんや、劣化ウランの被害を訴え続けたアル・アリ医師、そして、「戦後史の正体」を上梓された、孫崎享氏など多彩。

詳しくは折込のチラシをご覧ください。

(JIM-NET事務局長 佐藤真紀) 肖像画の前にたたずむ少女  
(2002年10月15日撮影)



# 生まれてくる命を守りたい

シリアルの内戦を止めたい。サダーカを立ち上げた田村君ともいろいろ話してきたが、なすすべがない。いつも、悶々としてしまう。

せめて生まれてくる命を取り上げて、明日のシリアに希望を託したい。妊産婦支援プロジェクトが立ち上がった。ヨルダンのアキラ病院で出産できる難民は幸せだ。シリア国内では、地獄絵が続く。シリアから避難してきたスレイ医師が例を挙げた。

「3週間前、テルビーサというところで、15年間子どもに恵まれず、ようやく妊娠した女性がいたのだが、政府軍のミサイル攻撃で家が破壊され、瓦礫の下敷きになってしまった。その女性は、死んでしまったが、おなかの中の赤ちゃんは生きていたので、直ちに野戦病院に連れて行き、帝王切開で、赤ちゃんを取り出した。赤ちゃんは元気に育っている。」



アンマンのアーキラ病院。JIM-NET&サダーカは、1月の終わりから2月半ばの間に、すでに帝王切開19件、通常分娩19件の出産支援をしている。

実は、僕がJVCにいた10年前、同じ思いで、バグダッドの赤新月社の産科病院を支援していた。子どもたちのプロジェクトをやろうものなら、サダメ政権を支持するのかといわれた。確かに子どもたちの歌や絵はサダメをたたえるものが多かった。

じゃあ生まれてくる子どもたちなら文句はいえないだろうと開き直ったのである。超音波エコーのブループを買ってバグダッドに届ける前に戦争が始まると、アメリカ軍の爆弾は、産科病院にも容赦なく振り落された。その爆弾は、さらに悲劇を生む。劣化ウラン弾や白リン弾の影響で、異常出産や死産が増えているという。特に米軍が激しく攻撃したファルージャだ。

アルビルのナナカリ病院にもファルージャからの患者が増えてる。

アイマンくん4歳。白血病だ。一か月前、顔が黄色くなって、鼻血が止まらなくなった。食欲もないとい

うので、ファルージャのあちこちの病院に行ったけど、検査ができない。バグダッドのイスカン病院に行ったものの、混んでいて、結局何にてももらえず、次の日にアルビルまで出てきた。

「むすこががんになったのは、米軍の攻撃だと思います。ファルージャは2006年と2007年に激しい攻撃を受けました。劣化ウラン弾なのか、白リン弾なのかよくわかりませんが。子どもたちのがんは増えていますし、死産も多いのです。私も最初の子どもは死産でした。2007年、米軍があちこちにいて、外に出ると撃ってくるので、病院には行けずに近くの産院（産婆さんが取り上げる）で出産しました。でも生まれた子どもの呼吸が弱くて、病院に連れて行かなくてはならなくなりました」とアイマンくんのお母さんは言った。お父さんは、「わたしが車を運転しました。必死でした。しかし、撃たれて、窓ガラスは割れましたが、私は運よく弾をよけることができました」と言う。お父さんは弾をよけるような身振りをするので、お母さんは思わず、「あなたは、まるでスーパーマンのように弾が見えるのですか」と聞いてしまったとのことだ。しかし、病院に着いた時には、赤ちゃんは既に息絶えていた。医者は、「せめて、あなた方が助かったことに、感謝しない」と慰めた。このケースは、劣化ウランや白リン弾の影響ではなく、戦争そのものが、赤ちゃんの命を奪つていった。

シリ亞でも似たような話は悲しいことに山ほどあるのだろう。

そして、今度は、アイマンくんが白血病になってしまった。お父さんの話では、一か月近くアルビルにいるが、泊まるところがない。お金を節約するために、ホテルに泊まるのは極力さけていた。ともだちの家を転々としたり、病院の廊下で寝たりしているとのこと。

最近は、感染症対策で患者の家族が病院に必要以上にとどまることを禁止しているのでなおさら行き場のないお父さんたちがいる



アイマンくん（4歳）



シリアル難民にも嬉しい「春」をの手ココ

# ナナカリ病院スタッフ 感染症対策研修（1）

望田 優子（JIM-NETアルビル駐在スタッフ）

昨年11月27日から12月7日にかけて、ナナカリ病院のペイマン医師、マハナス看護師、オマル事務局長を長野県松本市に招き、信州大学で感染症対策研修が実施されました。

3名とも日本を訪れるのは初めてであり、研修前は日本の文化や食生活について、そして医療制度や病院について熱心に調べるなど、準備に余念がない様子でした。また、イラクではお世話になる方におみやげをプレゼントすることも大事で、「日本の方々へのおみやげは何にしよう」と真剣に話し合っていました。そして、出発当日の空港で3人の荷物の大きさを見てびっくりり、「何が入っているの?」と聞くと、「イラクから日本の皆さんへのおみやげだよ」という回答が返ってきました。東京に着いてからは荷物を持って移動しなければいけないということに少し不安を覚えつつ日本に向けて出発したのでした。



写真左より、オマル事務局長、ペイマン医師、マハナス看護師（ナナカリ病院執務室にて）

ペイマン医師は、何よりも医師と看護師が同じ部屋でコミュニケーションを取りながら働いていることに驚いていました。イラクでは医師と看護師の間では大きな壁があり、

チームワークで一緒に働くということがまだまだ実現していないのが現状です。  
研修前から  
JIM-NETとして「チームワークが大事」とい



信州大学で感染症対策について学ぶ  
ナナカリ病院スタッフ

うことを伝えてきましたが、やはり百聞は一見にしかず、医師と看護師がチームとして治療や感染症対策に取り組んでいる様子を目の当たりにし、ナナカリ病院もこうならなくてはと話してくれました。また、マハナス看護師は看護実習の研修中に、看護師が患者さんの体を拭いている様子を見て「イラクでは看護師が患者の体を拭いている所は見たことがなく、日本の看護はとても丁寧で驚いています」と語っていました。さらに、信州大学で感染症対策チームの院内ラウンドにも参加し、院内全体での取り組みを知ることができました。

研修後、イラクに戻ったこの3名を中心にナナカリ病院感染症対策チームの活動活性化を目指しています。オマル事務局長は、「研修から帰ってきてからは、感染症対策がきちんと行われているか病院内を見てまわるようになりました。そして研修に参加した私たち3人が、日本での感染症対策の様子をきちんとナナカリ病院の他のスタッフに伝えることで、院内の意識を高めていきたいです」とこれから抱負を語ってくれました。

日本の感染症対策研修で学んだことを最大限活かせるように、ナナカリ病院のスタッフと一緒に取り組んでいきたいと思います。



諫訪中央病院で医師に質問するペイマン医師

長野県松本市に到着し、信州大学での研修が始まる前日には諫訪中央病院を訪問、感染症対策について講義を受けることができました。突然決まった訪問にも関わらず、感染症看護専門看護師の方がアラビア語に翻訳された手洗いポスターや感染症対策マニュアルが準備されており、3名ともその心遣いに感銘を受けていました。



研修のことが掲載された新聞を手にするオマル事務局長

そして、いよいよ28日から信州大学病院での感染症対策研修が始まりました。まず、病院建物の大きさ、院内の清潔さにも驚いていた3名、研修期間中は1日3部署を回るなどハードなスケジュールでしたが、信州大学の医師や看護師の説明を熱心に聞き、多くの質問も飛び出していました。

# ナナカリ病院スタッフ 感染症対策研修（2）

## < 信州大学での実習 >

坂下 一夫（信州大学医学部付属病院小児科医師）

### 1. 現在の状況

現在のイラクにおける小児白血病の治療成績は徐々にではあるが、確実に改善してきている。特に白血病の中でも急性リンパ性白血病の成績は治癒率が年々上升してきている。一つの要因として抗がん剤や抗生素質の供給、あるいは輸血体制（消耗品を含めた）の改善が挙げられる。また年1回ではあるがJIM-NET会議における情報交換は、たいへん有意義なものと考えられる。今後さらに治療成績を向上するためには、社会的不安を取り除くことが一番ではあるが、抗がん剤の使用に伴う骨髄抑制（白血球減少）時に発症する感染症あるいは免疫不全状態の患者に対してどのように対処するかが重要である。

感染症にはウイルス、細菌、真菌があり、それぞれに対してどのように注意して、感染したらどのように対処し、感染拡大を防ぐにはどうしたよいか、などの情報はインターネットや教科書には記載され、各個人で簡単に勉強できる社会になっている。イラクにおいても可能だとは思われる。よってイラクにおいても簡単に感染症対策ができるかというと、かなり厳しいのが現状である。それは、医療者すべてが共通な知識と認識を持ち対処しなければ感染症対策は意味のないものになってしまふからである。一人が「俺はいいや」という考えで医療を行うと、そこから感染が拡大し、患者が感染で亡くなってしまう。したがって病院として感染症対策に対する教育、システムをどのように構築していくかが重要である。

### 2. 信州大学での研修

今回ナナカリ病院より3名の医療関係者（医師、看

護師、事務）が松本の信州大学医学部附属病院を中心に、日本赤十字センター松本献血ルーム、長野県立こども病院、諏訪中央病院の協力のもとで研修を行った。信州大学医学部附属病院病院長 天野直二教授、小池健一小児科教授、看護部（松本看護部長、加藤副看護部長）、ICTとICTラウンド（金井先生、丸山看護師長）、リスクマネージャー（近藤看護師長）、救急部（岡元教授）、ICU（片岡看護師長、城井看護師）、薬剤部（大森教授）、東4病棟（高橋看護師長）、など各部署の多くの方々に協力していただいた。実習といつても制限があるためレクチャーと見学が中心に行われた。ひとつひとつの部門は独立した診療など活動を行っているが、すべて連携し感染症対策およびリスク管理が行われていることを認識できただろうか。このシステムはおそらく日本ではスタンダードなものである。患者さんに対してどのように対処するかも重要な問題であるが、ナナカリ病院独自の感染症コントロールのシステムの構築に役立てていただきたい。

### 3. 実習の問題点と今後

実習の問題点はやはり言葉の問題が大きいことを認識した。だいたいのことは理解できたのではないかと思われるが細部については不安が残る。この点について今後検討する必要がある。また感染症対策は治療成績の向上などのように目に見えるものではないので、感染症対策を行うスタッフのモチベーションをいかに維持するか、またサポートしていくかが重要な取り組みだと考えらえる。今後の実習方法に関しては改善と工夫の余地が残っている。

## < ナナカリ病院スタッフ東京滞在記 >

榎本 彰子（JIM-NETスタッフ）

長野で感染症対策研修の全日程を終えたペイマン先生とマハナス看護師は、東京へ移動。到着後にホテルの近くにあるモスクにお連れしたところ、とてもリラックスされていました。東京到着の翌日は、ナナカリ病院で活動していた川添看護師も合流し丸木美術館へ出かけました。原爆の図の前で、ペイマン先生が涙を流しながら見ていたのが印象的でした。その日は、イラク戦争のアメリカ人帰還兵も絵画展を開催しており、彼らと話す機会がありました。予期せぬ出来事だったため、ペイマン先生とマハナス看護師は何を話していくかわからなかったと後々言っていましたが、お互い戦争のない平和な社会を目指すために、イラク戦争を次の世代に伝えていくことが重要だと話していました。その後、高田馬場で研修の報告会を行いました。

次の日は、日本社会を知つてもらうため東京観光へ。まずは東京ジャーミーでお祈りと記念撮影。JCFの国

井看護師も合流し、その後、一行は浅草へ向かいました。ハラーム（豚・酒）な食材が入っていないものなら色々と試食するペイマン先生を横目に、マハナス看護師はお土産品に興味津々。途中で持ち合わせの日本円がなくなり両替に走るほどでした。

今回先生方のアテンドをしたこと、ナナカリ病院のこと、子どもたちに対する思い、今後の展望などを知り、日々イラクで奮闘する先生・看護師・事務職員・関係者を引き続き効果的にサポートしていきたいと思いました。



写真左より、マハナス看護師、榎本スタッフ、ペイマン医師

# 福島プロジェクト報告

小松 真理子(JIM-NET福島プロジェクト担当)

福島よりこんにちは！

今日も「はまなかあいづ」をあちこちと、市民による食品放射能測定所を訪ねて回っています。雪が降っても、そんなに交通が麻痺したりせず、肃々と生活が進むところに、雪国東北の強さを見る思いです。

須賀川にある放射能測定所は、もともと銀河のほとりという自然食レストランですが、前にもまして、自然療法をはじめとする様々なワークショップを開いて、より健康に生きる方法を共有しています。伊達市のりょうぜん里山がっこうでは、里山体験教室に来る子どもたちが、放射能測定器を見学してゆきますし、南相馬のとどけ島では、毎月の勉強会に加えて映画上映会も行い、仮設に住む人々も地元住民もいっしょに時間と意識を分かち合う取り組みを行っています。いわき市の子ども未来NPOセンターでは、他の測定所と協働で、生産者・流通・小売り業者・消費者をつなぐダイアログフォーラムを企画し、放射能に向き合うそれぞれの立場を話し合い聞きあう場を創ろうとしています。福島市のNPOほうらい&かあちゃんの力プロジェクトでは、徐々に地元の人々が野菜やイノシシを測定に持ち込んでくるようになり、今度測定を前提とした地域朝市を始めることになりました。飯館や富岡・浪江から避難してきたかあちゃんたちの作る健康弁当も種類が増え、福島駅前に割烹着カフェもオープンし、美味と癒しでファンを増やしています

先日ご紹介した「放射能リテラシー向上プロジェクト」で関わるそれぞれの測定所が、独自のスタイルで放射能の問題に立ち向かっています。たとえば、鎌仲ひとみ監督（JIM-NET理事）の「内部被ばくを生き抜く」にも出ておられるチーム二本松では、牛乳や各種食材を自主的に測りながら、そのデータを広く共有するとともに、お寺の幼稚園やご近所さんに、ゼロベクレルを目指した食品の提供や、乳幼児の家の除染を行っています。同じく小さな子どものお母さんたちが中心の3a! 安全安心アクションin郡山では、測定器のあるオフィスで毎週支援野菜市を開いてお母さんたちの座談会につなげ、また子どもたちの保養情報の発信や行政への申し入れなどにも取り組んでいます。

放射能について知りたいのは、消費者だけではありません。福島市の農民連や、伊達市のつきだて花工房もりもり館、いわき市のいきいきスカイストアなどは、公の放射性セシウムの基準値（一般食品1キログラムあたり100ベクレル）より低い自主基準を設けて、隣接する直売所に出荷する農家さんたちの野菜を中心で測っています。土壤から植物へのセシウム移行率は、当初予想されていたよりも低いことが過去2年間で分かってきましたが、やはり少しでも作物の汚染を低くしたいと農家さんは必死です。そのために、農家さんと大学の研究者と共に各田畠の土や水を測って、生産物のセシウム濃度との関連性を調べていく取り組みが、道の駅ふるさと東和などで行われています。土壤の測定は簡単ではありませんが、畠のみならず家の庭の土を測りたいといった要望も潜在的にはあるだろうと思っています。しかし、たとえ汚染土を除去したとしても、仮置き場が決まらない今は自身の敷地内に埋めるしかないというのが現状です。

原発事故から3年目に入り、福島のこの地でも「放射能」に対する意識の風化を感じます。すべて無視して日常に戻りたい人々の気持ちもよく分かります。しかし、そこに「あるものはある」のですし、何とか前向きに防護してほしいのです。



かあちゃんの力プロジェクトのみなさんと、  
あしたのチョコレート



స్కూల్ లైబ్రరీ స్కూల్ లైబ్రరీ స్కూల్ లైబ్రరీ స్కూల్ లైబ్రరీ స్కూల్ లైబ్రరీ

本プロジェクトを開始してから、もうすぐ1年が経ちますが、正直、放射能も含めた福島県内の状況変化の速さには、日々驚かされます。その変化が前進か後退かも見極めながら、常に状況知識を更新し、4月以降の福島支援のかたちを模索していくたいと思います。これからも応援をどうぞよろしくお願ひいたします。

# 2013チョコ募金へのご協力どうもありがとうございました！

齊藤 信一(JIM-NETチョコ募金担当)

事務所のインター호ーンが「ピンポン」と鳴りドアを開けると郵便屋さんが立っておりました。その手を見ると、大相撲の日馬富士関が勝って受け取る賞金の束と同じぐらい厚い、申込みの封書の束です。全部の封書がポストに入らず郵便屋さんが直接事務所に持つて来てくれました。翌日は、もっと厚い封書の束です。



宛先は「JIM-NETチョコ募金係」。皆で開封すると「毎年ほんのわずかで---」「この時期を待つてました---」「今年もこのチョコ募金が出来るのが幸せです---」等始まり、最後には「少しですみません」と書かれております。いやいや「千里の道も一歩から」のことわざのごとく、1セットづつの積み重ねで今年の目標チョコ募金16万個達成になります。本当に嬉しいです。

又々、事務所のインター호ーンが「ピンポン」ドアを開けると「私の散歩コースにJIM-NETさんの事務所があるなんて知らなかった」とおしゃって直接チョコ募金に来て頂きました。皆様お近くに来られた時は是非お寄りください。「大歓迎」です。春は神田川の両岸に桜が咲き綺麗ですよ。

先日、チョコ募金コールセンターの受付を行いました。呼び出しベルが鳴った電話をとり、部署と名前を名乗り、その後「すいません不慣れな者で」と申し上げると、逆に「お休みの日までご苦労様、4セットの予定だったけど5セットに変更するわ。風邪など引か



森たかの

松本市のJCFにいた頃のご縁で、募金時期のチョコ要員として今年で6年目になります。主にチョコ発送担当です。

年々、チョコの数が増え続け、嬉しい悲鳴をあげつつも、沢山のダンボールに囲まれた中での作業は遣り甲斐があり、またイラクの病気の子どもたちが描いたイラストにパワーをもらしながら、充実した毎日を過ごしています。

丁寧な作業、正確な発送を心がけている“はなみずき”との連携で、今年は16万個のチョコが全国に飛び立ちました。

ジムネットの活動が多くの方に支えられ、チョコのつながりはあたたかい・・・今年もそう実感する中で、勇気や希望をいっぱいもらいました。

こうして、チョコ募金に携われることに感謝の気持ちでいっぱいです。

ないように頑張ってね。JIM-NETの皆様に宜しくお伝えください」と上品な女性の方からのお申し込みがありました。

電話受付をして頂いたアルバイトの方のなかには、「良い仕事なので来年も応募したい」と言られた方がおりました。

直接、募金者さまとお話をすると、私たちが逆に募金者さまからパワーをもらっております。



写真右：  
電話受付の様子

皆様から頂いたパワーも福島・イラクの子供たちにしっかりとお届けいたします。

最後に「私たち夫婦には子どもは授かりませんでした。でもいます、福島・イラクの子どもたちがいます」と



おっしゃって、チョコ募金のお申し込みがありました。

募金者の皆様は他人の痛みがわかる人ばかりです。そして、この輪をもっともっと広げたいです。

本当にありがとうございました。

写真左：  
JIM-NET東京事務所の  
玄関からの眺め。  
福島からやってきた  
アカペコとともに。



西村 奈穂子

こんにちは入金担当の西村奈穂子です。昨年、准認定ファンデレイサーという資格を取得しました。ファンデレイサーとは、ボランティアや寄付を社会に対して働きかける仲介役で、広報などを通して自団体の活動を伝え、社会課題への共感と支援の輪を広げるものです。かけだしてですのでくじけることが多くありますが、募金者の皆様に支えて頂きながら頑張っています。今年届いたメッセージをご紹介させて下さい。

「支えあうように作られた私達人間の小さな愛が集まれば、地球を包むことができるんじゃないかな。」

イラクと福島の子どもたち、シリア難民の妊娠婦さん、そしてスタッフにまで温かい励ましを頂きました。感謝申し上げます。

これからもJIM-NETへのご支援と社会課題の解決に力を貸し下さい。宜しくお願ひ致します。

鎌田代表のつぶやき。。。。

～おかげさまでチョコ募金が終わりました～

おかげさまでチョコ募金が終わりました。  
たくさんの方から、ご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

「チョコ募金のことを知りました。メッセージを読んでいて、心に触れるものがありました。涙が止まりませんでした。ぜひとも協力したいと思いました。」 - 大分県の方からです。

「新しい仕事につくので、職場の人にご挨拶に配りたいと思っています」 - 長崎県の方からでした。

結婚式の引き出物にするとか、誕生日プレゼントのお返しにするとか、亡くなった方の遺言でチョコ募金を決めてくれた方とか、法事のお返しに配るとか、たくさんの方がいろいろなかたちで応援をしてくださいました。



「2回目の注文です。パッケージがおしゃれで、みんな喜びます。男性だけではなく、日ごろお世話になっている女性にもさしあげることにしました。」こんな声もいただきました。

JIM-NET 新スタッフよりご挨拶



**مرحبا** マルハバ！  
こんにちは。海外プロジェクトを担当している榎本彰子です。

これまでにエジプトで青年海外協力隊として女性の生活改善活動に携わり、その後大学院で国際開発学(開発経済)を学び、国際機

関でのインターンを経て、JIM-NETスタッフの一員となりました。イラクの医療支援(感染症対策)を中心に、シリア難民支援や福島支援もサポートし、現場の課題やニーズに即したプロジェクトを実施することで、現地の人々と一緒に子ども達の支援を行っていきたいと思います。

チヨコ募金の時期は申込受付をさせていただき、皆さまの温かい思いやりに触れました。日本の皆さまの思いを現地に、現地の子どもたちのことを皆さまに届け、活動を通じて人と人のつながりに役立ちたいと思います。どうぞ宜しくお願ひ致します。

演歌歌手の神野美伽さんが、  
お世話になっている方にバレン  
タインのチョコを配るといって、  
100セット400個分のお申込をしてくださいました。  
すぐに事務所に御礼の電話をしました。音楽評論家の  
湯川れい子さんから聞いたというのです。たくさん  
の方々のバトンタッチで、チョコ募金は成立して  
いることがわかりました。



発送を手伝ってくださったKFJ多摩はなみずきの障害者の方々、本当にご苦労様でした。缶を作ってくれた製缶工場の方、利益がまったくないのにチョコレートを提供してくださった六花亭の皆様、本当にご苦労様でした。感謝、感謝、感謝です。

必ず、イラクの子どもをたすけるため、そして福島の子どもを支えるため、そして新しく加わった支援、シリアから脱出した難民の妊婦さんや子どもを救うために、このチョコ募金で集まったお金を有効に使います。本当にありがとうございました。

～新刊のご案内～

## 『イラクから日本のおともだちへ』

文/佐藤真紀・堀切り工 協力/JIM-NET



全国の書店およびアマゾンにて  
1,700円（税別） 子どもの未来社

今年の冬は立春過ぎても  
なお寒い日が続きました。  
事務所の前を流れる神田川  
に、桜の花びらが漂う日が  
待ち遠しいこの頃です。

JIM-NET便り 2013年3月号  
発行: 特定非営利活動法人  
日本イラク医療支援ネットワーク  
発行日: 2013年3月15日  
〒171-0033  
東京都豊島区高田3-10-24  
第二大島ビル303  
info-jim@jim-net.net  
☎ 03-6228-0746